

## オタワ会議の意義

今回のオタワ・サミットでは、参加首脳が多くが新しい人々で構成されている。レーガン大統領と鈴木首相は、前回以降に就任した人々であり、トルンEC委員長は今年初めに就任、シュミット西独首相は昨秋再選され、フランスのミッテラン大統領はこの五月、イタリアのスピノリニ首相は七月に誕生したばかりの新首脳である。したがって多くの首脳が今後かなり長期の在任期間を期待できるため、この時期に各国の共通目標と自由世界の直面する問題、およびこれらの問題への対処の仕方について十分な討議を尽くすことは時宜を得ているだけでなく、今後の国際関係に不可欠なことといえる。

各国首脳は、相互の間で不意打ちや一方的措置を可能な限り避けるために協議し合うことを再確認する必要がある。

カナダは西側サミットに多大の価値を認めている。カナダは、サミットが今後とも、現在のような機能を果たすために継続されるべきであると考え。私自身の考えを上げると、サミットは従来の機能をさらに超えて、マクロ・ポリテイカル・アプローチでも言うべき視点をもち始めてもよいのではないかと考える。

カナダの立場からいえば、わが国の最も緊密な友邦国の間でこの種の協議および協調が確実に行われることはとりわけ重要である。米国とEC諸国との間、あるいは米国と日本との間には、未解決の

不一致が存在し、われわれは、きわめて微妙な立場にある。七〇年代初期の通貨問題然り、あるいはまた今日の貿易摩擦、デタントの見通し然り。したがってわれわれは、先進民主国間に見られる経済・政治戦略の不一致を克服するため、われわれにできるあらゆる方法で貢献していきたいし、またその点でサミットは大いに役立つものと信じている。

ところでここで強調しておかなければならないのは、各国の指導者がオタワ会議でこれらの問題に決着をつけることを期待すべきでない、という点である。これらの問題は、事の本質上、絶えず各国政府につきまとう問題であり、しかも各国首脳はほかの問題にも目を向けなければならぬからである。たとえばインフレ退治と今後多くの工業国に予想される低成長ないしゼロ成長のもたらす諸問題への対処との間に起こる緊張も、オタワ・サミットの大きな議題となろう。そのほか、オイルダラーの還流、多くの発展途上国が抱える債務と国際収支の問題も重要テーマとなりうる。

国際貿易の現状も憂慮すべき状態にある。オタワ・サミットでは、二国間の摩擦を強調して破壊的影響をもたらそうとする保護貿易主義をいかにして回避し、また、参加国全員の利益に沿った世界貿易拡大の活力をいかにして回復させるかが討議されるものと思われる。そのほか、ベネチアで合意された総合エネルギー戦略の進展状況も、もちろん検討される筈である。

## 政治と文化の町

# 首都オタワ



連邦議事堂（手前）からオタワ市街を望む。

「この偉大な国の首都を、文明と商業活動の中心から遠く離れた、全く無価値に等しい場所に定めたということ、私は、狂気の沙汰としか思えません……。私は、当地の公共施設に投下された莫

大な費用にもかかわらず、今後四年間、オタワが首都になることはあるまいと確信するものであります。」

この極秘の予言は、一八六六年、現在のオンタリオ、ケベック両州にあたるカナダ植民州の総督であったモンク卿から、英本国の植民相に宛てて提出されたものである。ビクトリア女王は、その八年前、時の政府からカナダの植民州の恒久的な首都を選定するよう乞われ、オタワを選んだ。オタワはさし当り最も反対の少ない候補地である、というのが、この問題について最も大きい影響力をもっていた、女王の補佐役で前総督のエドモンド・ヘッド卿が女王に奏上した意見であった。ケベック、トロント、モントリオール、あるいはキングストンのいずれかを選んだ場合には、おおかたの同意を得るわけにいかないことは明らかであり、した

